神奈川大学・浙江大学 第11回日中学術交流シンポジウムの報告

人文学研究所所長　鈴　木　陽　一

1　実施された日程

11月 4日（日）：金建人，鈴木による成田出迎え。

11月 5日（月）：午前中打ち合わせ，午後1時より20－301において特別シンポジウム「金庸作品の魅力を探る」開催。

11月 6日（火）：午前，午後を通して通常の形式でシンポジウムを開催。夕刻よりラックスホールにおいて歓迎宴。

11月 7日（水）：金庸，陳平原，鈴木の三名は広報課主催の座談会に参加。浙江大の他のメンバーは学内見学。午後2：40より張涌泉氏は学生，及び市民対象の講演を行う。また，午後3：00より今後の学術交流のあり方について討論。

11月 8日（木）：金沢文庫，鎌倉の圓覺寺，建長寺などを見学。

11月 9日（金）：経済関係のメンバーと共にお台場などを見学。

11月10日（土）：帰国。

2　シンポジウムの概要

本年のシンポジウムは全体テーマを「歴史と文学の境界」とし，全体を三部門にわけ，三日間に分けて行われた。そのおよその内容は以下の通りである。

＊11月5日（月）：シンポ1＝特別シンポ「歴史と文学　―金庸作品の魅力をめぐって」

金庸氏（浙江大学人文学院長）に基調講演を御願いし，陳平原（北京大学教授），王勇（浙江大学日本文化研究所所長），寥可斌（浙江大学人文学院副院長），岡崎由美（早稲田大学教授），金文京（京都大学教授）の各パネラーがそれぞれの専門的立場から発言した。陳平原と寥可斌氏は中国での金庸の受容のあり方について報告し，王勇氏は日中間での武侠小説の違いについて発言した。また，金文京氏は金庸氏の作品に見える辺境と辺境に暮らす少数民族について発言し，岡崎由美氏は金庸の格闘シーンの描写について発言した。シンポジウムは一旦休憩した後，主としてパネラー及び会場からの質問に直接金庸氏が答えるという形式で行われた。司会は金建人（本学特任教授，浙江大学教授）と鈴木陽一が担当した。

＊11月6日（火）

午前：日中比較文化の視点から

佐野賢治（本学教授）「十三塚と十三オボ―塚の比較民俗学―」

山口建治（本学教授）「散楽の伝来とヲコ（烏滸／嗚呼）の語源」

午後：歴史と文学　―叙述の言説をめぐって

楼含松（浙江大学教授）「古代小説与歴史的関係」

徐岱（浙江大学教授）「『愛生』の哲学―金庸小説的美学考慮」

小林一美（本学教授）「日本と中国における民衆運動と通俗文学―その比較的考察―」

石井美樹子（本学教授）「不貞のとがで裁判に引き出される王妃
―シェイクスピアの『冬物語』における歴史的な事実―」

＊11月7日（水）

張湧泉（浙江大学教授）「日本漢字探源二題」

3　総括

今回の特別シンポジウムは，金庸氏の来日により多くの参加者を迎えることができたこと，また各方面の御協力により，金庸シンポジウムとしては現在最もふさわしいパネラーを招聘できたことは大いなる成果である。この結果，本シンポジウムはメディアの取り上げることとなり，大修館の月刊雑誌『しにか』11月号，東方書店及び内山書店のPR誌にそれぞれ詳細な案内が掲載された。また金庸氏の小説の翻訳を刊行している徳間書店は，10月出版の作品の折り込みに本シンポジウムの案内を掲載した。この他にNHK教育テレビの中国語講座が金庸氏にインタビューを行い，1月18日に金庸氏が神奈川大学とのシンポジウムのために来日した旨のコメント付きで放映された。更にチャイナ大富（CSの中国語専門チャンネル）の社長が，自らインタビューに訪れ，放映は未定ながら，その一部が同チャンネルの番組案内週刊誌に掲載されている。

当日はPRのかいもあって，23－301は4時間余りほぼ満員の状態が続き，一時は相当数の立ち見が出るほどの盛況であった。また，本学の学生（留学生も含む）と共に，他大学からの参加者が多かったことも今回のシンポの特色であった。こちらの掌握している限りでは，九州からの参加者もあった。

今回のシンポジウムの成功の最大の理由は，浙江大学人文学院の指導部の全面的協力のもと御高齢の金庸氏の来日が実現したことによるが，その背景に10年を越える交流を通じて本学と浙江大学との間に築かれた信頼の絆があったことを忘れることはできない。長期に渡る交流の中で，日中双方の，中国の諺にいう「井戸を掘った人々」の多年の苦労に謝意を表する。

また今回のシンポに際しての人文学会の甚大な協力，更に国際交流センターはじめ学内の各方面の協力に対して深甚なる謝意を表する。

今回のシンポジウムの成功は，シンポジウムのもつプラス面が最大に発揮されたものであると共に，通例のタイプのシンポジウムを同時に開催することによって，その限界も極めて明瞭になった。シンポジウムは学術交流の成果を公開，交換するものではあるが，地道な共同研究に取って代わるものではないということが明らかになった。後でも述べるように，両校の学術交流の発展のために継続されてきたシンポジウムは，これまでにない充実した内容と数多くの参加者という成果を挙げ，とりあえずその歴史的役割を終えたのである。

4　今後の交流のあり方について

本学人文学研究所，浙江大学人文学院，同日本文化研究所は今後の交流について議論を行った。以下，合意された内容を箇条書きで列挙する。

①全学交流協定の調印問題については，浙江大学側が再度学長に調印を促すこと，それが難しい場合には双方が両大学の副学長による調印の道を探ることで合意した。

②双方は全学交流協定の調印問題が主として浙江大学側の事情から容易ならざる状況にあることを共通の認識とし，解決への努力は惜しむものではないが，全学協定問題がどのように決着したとしても，これまでの成果を踏まえながら，本学の人文学研究所と浙江大学の人文学院及び日本文化研究所は交流を継続し，更にレベルの高い学術交流を目指して双方が努力していくことで意見の一致を見た。

なお，全学協定が締結されないまま交流を行う場合，浙江大学側には財政面での大きな障害はないが，本学の人文学研究所においては予算的措置が保証されないという問題があることを双方が認識した。

③今後の学術交流の継続にあたっては，シンポジウム形式は必ずしも採らないこと，予めスタイルを定めての交流は避けること，着実で多様な成果が得られるよう，交流の内容と方法について双方で検討し，話し合っていくことを確認した。また，研究のテーマに即して，それぞれの大学が有するネットワ

ークを活用し，他大学，他研究機関のメンバーを組織した研究交流をも行うことで合意した。

④今後の交流の際の費用の負担については日本文化研究所王勇所長より本学人文学研究所及び浙江大学の人文学院に対して以下の申し出があった。

＊相互に訪問する場合，航空運賃については訪問する側が全額負担し，滞在費について受け入れ側が負担する。

＊滞在費の負担については，「宿泊数×宿泊者数」のいわゆる延べ人数を同数とすることで負担の平等を目指す。

この申し出のうち運賃については双方が同意した。滞在費の問題は，本研究所は基本的に同意し，人文学院側からは前向きに検討するが，財政的な問題なので，回答を保留する旨発言があった。

講 演 会 要 旨

開催日：2001年6月20日（水）午後3時～午後5時
会　場：神奈川大学人文学研究所資料室（17号館216号室）
講演者：ホイト・ロング氏（ミシガン大学東洋言語文化学部）
演　題：「日本の環境文学と『自然』その概念
—比較環境文学の可能性と困難さ—」

アメリカにおける環境文学・エコクリティシズムの発達は，主として1960年代の環境問題の表面化とそれに対する環境文学の盛り上がりに始まる。1980年代後半には環境文学研究が活発となり，1990年代に入ってからは，環境文学とエコクリティシズムの学者が増えている。1992年にASLE (Association for the Study of Literature and Environment) という学会が正式に創立された。

ここで，環境文学とは簡潔には人間社会と自然環境との関係を主な題材として書かれた文学作品であり，ヘンリー・ソロー，ジョン・ミュア，レーチェル・カーソンなどが代表的である。しかし，ローランス・ビュールなどは環境文学をどう定義すべきかにより詳しい指針を挙げている。これに対して，エコクリティシズムとは，自然に焦点をあてて，環境と人間の関係を中心に作品を分析する文学の解釈方法である。

こうした，環境・文学評論はアメリカから日本にももたらされ1994年には環境・文学会 (ASLE-Japan) が設立されている。

アメリカから日本へというプロセスにおいて日本における環境・文学評論には2つの一般化論が発生する傾向がある。1つは，オリエンタリズム的な一般化論であり，もう一つは西洋に解決があるという一般化論である。前者は，近代化以前の日本文化や伝統に今の環境問題を解決するための手がかりがあると考えるもので，後者は西洋の文化に解決方法を探るべきであると考えるものである。しかし，いずれの一般化論においても，近代を看過してしまう点と，「自然」という概念の多様性を隠蔽するという点で問題があると考えられる。

日本における環境・文学評論の本来のあるべき姿は，日本文学を通して，「自然」という概念の多様性・多義性を知ることであると考える。

（文責：松本安生）

人文学研究所

所長	鈴木陽一
国際交流	孫安石
所報	寺沢正晴
会計・講演	古屋喜美代
図書	西野清治
共同研究・叢書	岩本典子

執筆者紹介

鳥越輝昭	本学外国語学部教授
中村浩平	本学外国語学部教授
河上婦志子	本学外国語学部教授
高野繁男	本学外国語学部教授
水野光晴	本学外国語学部教授

人文学研究所報 No. 35

二〇〇二年三月二五日　印刷
二〇〇二年三月三〇日　発行

頒価　一、〇〇〇円

編集兼発行人　横浜市神奈川区六角橋三－二七－一
神奈川大学人文学研究所
代表者　鈴木陽一
電話〇四五（四八一）五六六一（代表）

印刷所　株式会社　欧友社
電話〇三（三二六〇）六〇四六（代表）